

新分掌・探究推進部の活動記録

—探究力の向上と教員志望者の育成を目指した取り組み—

探究推進部 小田原健一

探究活動の充実化を図ってきた本校は、今年度より探究推進部を発足させた。新分掌の目標は第一に、学校がスクール・ポリシーとして掲げる「人生を切り拓く探究力」として「主体的に学び続ける力」、「他を受け入れ協働する力」、「新たな価値を創造する力」を育むこと、第二に、総合的な探究の時間を充実させ、持続可能なものとする事とした。また、総合的な探究の時間を探究活動の軸として、育てたい生徒像を、やはりスクール・ポリシーを参考に「地域と協働し、子どもを成長させる意欲と熱意を持った教員志望者」、「多様性を理解し、周囲と協働して社会で活躍する意欲と熱意を持った人材」とした。この一年で、目に見える大きな成果が表れているとはまだ言い難いが、今後のためにも本稿で一年間の活動を報告したい。

<キーワード> 探究力 総合的な探究の時間 高大連携 教員養成

1. はじめに

新分掌の発足こそ今年度からであるが、「探究推進」という学校の方向性は、本校の募集定員が 120 名に減少することが決まった令和元年度からプロジェクト会議を編成して議論を繰り返し、準備をしてきたものである。そして実際に 120 名定員の 1 年生が入学した令和 3 年度から、少人数制となった新しい学校の魅力を作り出すために本格的に探究活動の充実化を目指し実践を重ねている。

探究推進部発足後、目標と学校内での役割を設定した。そして、キーワードとして「発信と連携」を掲げた。このキーワードの背景には、これまでのプロジェクト会議での議論がまだ学校全体に十分浸透していないのではという反省がある。この一年間の活動を通して、目標の達成、役割の遂行のために活動してきたが、まだ道半ばという段階で、特に発信については課題が残っている。それでも、この原稿を残して、今後の活動に繋げていきたいと思っている。

2. 今年度の方針

新分掌発足が決まり、年度当初の分掌会で、掲げる目標と担う役割を検討した。そして、その結果を職員会議で次のように示した。

(1) 目標

- ①探究活動を推進することで、生徒の「主体的に学び続ける力」、「他を受け入れ協働する力」、「新たな価値を創造する力」を育む
- ②探究活動の軸となる総合的な探究の時間を充実させ、且つ持続可能なものとする

(2) 主な役割

- ①各学年と連携しながら、総合的な探究の時間（附高ゼミ含む）の計画立案をする
- ②愛知教育大学と連携しながら、附高ゼミの内容を充実させる

- ③各分掌、各教科と連携しながら、学校の教育活動全般において探究活動を推進する
- ④学校外（他校、地域社会、企業など）から収集した探究活動に関する情報を、学校内に発信する

また、探究活動の軸となる総合的な探究の時間については、本校のスクール・ポリシーに照らし合わせ、次のように目標設定をした。

- （１）育てたい生徒像
 - ① 地域と協働し、子どもを成長させる意欲と熱意を持った教員志望者を育てる
 - ② 多様性を理解し、周囲と協働して社会で活躍する意欲と熱意を持った人材を育てる
 - （２）育てたい力
- 人生を切り拓く探究力（主体的に学び続ける力、他を受け入れ協働する力、新たな価値を創造する力）

発足時に掲げた役割の中で、現段階で課題と感じているのは③④である。③の連携については、碧海野祭（文化祭）の午後に３年生の探究活動の成果発表の時間と場を確保してもらったり、２時間連続の時間割変更に対応してもらったりなど、動き出している面もあるが、「学校の教育活動全般において」という役割遂行には至っていない。④の発信については、役割を果たせていない状況なので、探究活動を学校全体で活性化させるためにも、改善しなければならない。

また、教員志望者を育てるという点については、授業時間からは外れてしまうが、まず希望者を募った課外活動を始めてみた。熱心に参加してくれる生徒もいるが、この活動を総合的な探究の時間の枠内で実施出来るかどうか、今後検討を進める予定である。

３．総合的な探究時間の実践

本校は、名称の通り教育大学の附属高校としての強みと利点を持っている。探究活動の充実化を目指した昨年度のプロジェクト会議では、愛知教育大学との連携により探究活動への支援を受ける方針が固まっていたため、探究推進部でも高大連携で生徒の探究力を育てる方針を採った。従って、本報告では愛知教育大学と連携した事業である研究室訪問（１年）、高大連携出張授業（２年）、附高ゼミ（２年）を中心に報告する。この３事業のうち、研究室訪問以外の２つは新たな試みということもあり、大学側に正式に依頼したのは、新年度になってからで、事業ごとにその都度依頼をする状況であった。何とか大学側の理解と協力により実施することが出来たが、実施前の慌ただしさを解消する必要性を感じた。そこで大学側からの要請もあり、今年度中に次年度に向けた打ち合わせと依頼をするところになっている。

（１）第１学年（研究室訪問）

研究室訪問の目的は第一に学問に対する興味・関心や物事を深く考え捉える姿勢を養うこと、第二に自らの探究活動を進めるための行動指標を学ぶことである。５月１６日（月）に事前学習としてガイダンスを行い、その後の訪問先希望調査を経て６月２日（木）の総合的な探究の時間を２時間連続として、５名を原則とする班編成で生徒たちは２４の研究室を訪問した。少人数班で訪れることを優先したので、必ずしも第一希望の訪問先に全員が行けたわけではない。そこで、６月残りの３週を事後学習（準備２回・発表１回）として、訪問で学んだことを発表し合あうことで情報共有を図った。



図1 研究室訪問の様子1

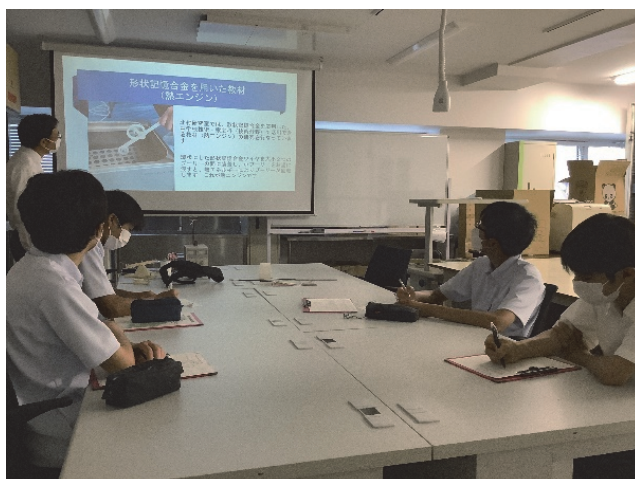


図2 研究室訪問の様子2

(2) 高大連携出張授業（第2学年）

この事業は今年度から始めたもので、同じく新事業で探究活動の要となる附高ゼミに繋げるために企画したものである。目的は、課課題定の方法などを学んで探究活動の指標とすること、後に始まる附高ゼミの講座選択の判断材料とすることである。附高ゼミの判断材料とするために、附高ゼミと同じ8つの授業を設けた。附高ゼミは愛知教育大学の学系に合わせて教育科学1・2、人文社会1・2、自然科学1・2、創造科学1・2の合計8講座を設けることにしており、この出張授業でも4学系からお二人ずつの先生に協力をいただいた。同一時間帯に2つの授業を組むように調整し、生徒には事前調査を行い、基本的に希望した授業を受講させた。日程は6月13日（月）と6月16日（木）で、両日とも総合的な探究の時間を2時間連続とし、教務部には時間割変更に対応してもらった。出張授業を受講した生徒たちは7月中に所属ゼミの予備登録をし、夏休み中のオープンキャンパスを中心とした進路学習、9月22日（木）の大学出前講義（進路指導部による企画で、生徒は愛知教育大学以外の大学の先生方による講義を受講）などを経て、10月上旬に所属ゼミの本登録を行った。こうして、10月24日（木）からの附高ゼミ開始を迎えた。2つの事業とも今年度始まったもので試行錯誤の段階だが、現状の課題は、別々に依頼したこともあり、高大連携出張授業と附高ゼミでは担当される大学の先生が異なる講座もあるなど両事業の結び付きの弱さだと認識している。次年度以降は、先に述べた研究室訪問とこの高大連携出張が附高ゼミに繋がる道筋を明確に示していきたい。



図3 高大連携出張の様子1



図4 高大連携出張の様子2

(3) 附高ゼミ（第2学年）

附高ゼミは、先に示し通り8つの講座を設け、高大連携で生徒の探究力を育てようとする試みで、総合的な探究の時間の中核と位置付けているものである。本研究紀要では、附高ゼミを担当している青山教諭（探究推進部）が詳細報告をしているので、そちらをご覧ください。

(4) 第3学年（文系）の総合的な探究の時間

現3年生（第48回生）までは200名定員であるが、探究活動の充実化という学校の方針は決まっていたため、先行して種々の実践に過去2年間取り組んで来た。この学年まで3年次に総合的な探究時間をカリキュラムに入れているのは文系クラスのみのため、文系の生徒たちは2年間の実践を踏まえ、「課題の解決に向け一歩踏み出す」をテーマに各々が活動をした。一部の生徒は高校教員の指導のもと、愛知教育大学の先生に連絡をとり、個別支援を受けながら活動した。碧海野祭では、生徒会・生徒指導部に依頼して発表の時間を確保してもらい、途中経過をポスター形式で発表した。



図5 ポスター発表の様子1



図6 ポスター発表の様子2

4. 教員志望者対象課外活動

本校へ入学してくる生徒の中で、愛知教育大学への進学を希望する生徒は多い。過去3年間の1年生4月の進路希望調査を確認すると、令和4年で53人（44.2%）、令和3年で64人（53.3%）、令和2年で91人（45.5%）となっている。教員志望者の数も同数程度と考えられ、教員志望者が多く集まる学校というのは本校の特色の一つである。また、今年度からスクール・ポリシーで「地域と協働し、子どもを成長させられる幼小中高特などの教員養成に進む人を育てます。」と目指す生徒像の一つに掲げている。その一方で本校の大きな特徴である愛知教育大学への特別推薦入試は、現高校2年生までで終了することになっている。この制度は愛知教育大学と附属高校の高大連携により、高校2年生の段階から希望者を対象に夏・冬・春の長期休暇を利用して大学の先生の授業を受講させ、受講者のうち適性などから総合的に選抜された者が特別推薦入試に臨むというもので、高大連携で優れた教員の育成を図るものである。附高ゼミは新しい高大連携事業としてスタートするが、教員養成という柱を残し、強化する必要性を感じ、今年度新たに熱意と意欲を持った教員志望者を育てることを目的とした課外活動を立ち上げた。次の図7はその年間活動予定（職員会議資料より抜粋）である。

| 回数 | 日時 | 予定講師 | 予定内容 | 予定担当者 |
|-----|-----------------------------|------------------|------------------|---------|
| 第1回 | 7月4日(月) 16:40~17:20 | 前期教育実習生の参加希望者 | 高校生から実習生へのインタビュー | 小田原(山本) |
| 第2回 | 9月21日(水)頃 16:00~16:50 | 西牟田校長 | 幼・小・中・高の先生の違い | 宮本 |
| 第3回 | 10月7日(金)頃*中間最終日 13:00~13:50 | 後期教育実習生の参加希望者 | 高校生から実習生へのインタビュー | 有本(山本) |
| 第4回 | 11月16日(水)頃 16:00~16:50 | 教職大学院生(後日、依頼) | | 青山 |
| 第5回 | 11月19日(土) | | 科学・ものづくりフェスタ参加 | 足立 |
| 第6回 | 12月7日(水)頃 16:00~16:50 | 愛知教育大学の先生(後日、依頼) | 高校時代に取り組むべき事 | 足立 |
| 第7回 | 2月8日(水)頃 16:00~16:50 | 教職大学院生(後日、依頼) | | 青山 |
| 第8回 | 3月8日(水)頃 16:00~16:50 | 探究推進部 | 活動の振り返りと次年度の計画 | 探究推進部 |

図7 年間活動予定 新分掌発足後の発案のため、
年度途中の提案だったが、開始することができた。

対象生徒は1・2年生のうち登録を希望した42名で、毎回1週間ほど前に出欠調査をして当日を迎え、参加者は多い回で32名、少ない回で21名である。第3回が中止になったり、第6回が12月から1月に延期になったりと若干の変更・調整をしながら進めている。課外活動ではあるが、高大連携の要素を残すべく、大学の先生や教職大学院生にも協力を依頼している。

次の2つの文は第2回、第3回に参加した生徒が振り返りで書いたもので、図8・9は活動の様子である。

「これまでは教師になりたいとぼんやり思っただけでしたがこの講義を聞いて、私は自分がどんな教えられる先生になりたいのかについて改めて考えて自分が教えることが単に知識として頭に残るだけでなく、その先で生徒一人一人が自分の学びや考えに発展できるような興味が湧くような楽しい授業ができるようになりたい。」(第2回)

「今まさに教師を目指している大学院の先生とのタイムリーな将来の話ができて、今後の進路選択に生かせそうな視点を多く得ました。また、それぞれの先生の学生時代の生き様や今に至るプロセスを伝授していただき、今後の学習意欲に対しての刺激を受けました。」(第3回)



図8 教職大学院生との交流(第4回)



図9 教職大学院生の先生の講義(第6回)

もともと意欲的な生徒が参加していることもあるが、充実感が伝わる文章を書いている生徒が多く、中には毎回出席し、活動の記録をポートフォリオに残している者もいる。熱意と意欲を持った教員志望者を育てることを目的に新たな活動を開始して、少しずつ前進している手応えを感じている。今年度は教員志望者に対象者を限定しているため課外活動として始めたが、働き方改革の観点からすると、課外活動として続けるよりも、附高ゼミなど授業の中に組み込めないかという思いもあり、将来的には位置付けを変更できないか模索しているところである。

5. おわりに

令和元年より、本校では生徒の探究力育成を目指して準備を進めてきた。そして、今年度スクール・ポリシーを定め、目指す生徒像の一つに「教員養成に進む人」、本校における学びの一つに「人生を切り拓く探究力を育む学び」を掲げた。探究推進部ではこれらの点を意識して活動を開始したが、まだ道のは半ばである。次年度以降、ここまで述べてきた現状の課題を改善していき、分掌名の通り本校における探究推進に貢献していきたい。

6. 参考文献

文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編（平成 30 年 7 月）』

小田原健一（2022）「探究活動の充実と継続を目指した取り組み—議論と実践の報告—」

『本校研究紀要第 49 号』